前回までのあらすじ

流遠(るとお)やみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があって、友達がいて、好きな男の子がいる。
しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。
少女の名はツバキ・タカチホ。
彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。
ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅(せんめつ)であり、彼女はそのための存在――〈機獣(きじゅう)少女〉だった。

地球での〈カタストロ〉を巡る事件は、殲滅(せんめつ)完了という形で終息した。
ツバキは、決戦の場に現れた二人の謎の少女、ファフロウ姉妹が開いた『門(ゲート)』によって、半(なか)ば諦(あきら)めていた故郷への帰還を果たした。
しかし、事後処理が終わり、これまでの生活が再開すると思っていた矢先、新たな脅威が惑星ゼヘナに現れた。
その名は〈プレケース〉。
〈カタストロ〉に近しい性質を持ちながら、より脅威度の高い敵に対し、〈機獣少女〉達は苦しい戦局に立たされていた。

※登場人物紹介はこちら

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL

惑星ゼヘナ全域での〈プレケース〉大量発生から、七十二時間が経過していた。

突然の襲来に加え、未知の敵という心理的なストレスから、序盤は劣勢に立たされていた〈機獣少女〉だったが、〈プレケース〉との戦いの情勢は現在、均衡を保ちつつあった。

きっかけは、不調のため稼働を停止していた〈ジェネレーター〉を、〈プレケース〉が素通りしたという報告だった。それにより、一部の〈ジェネレーター〉を意図的に停止させ、戦線を縮小する事に成功した。防衛対象が減れば、戦力を集中させ、ローテーションで迎撃する事が可能となる。

無論、それだけ一ヶ所に集まる敵の数も増える事になるが、〈プレケース〉単体での戦闘力は、そう高くない。昆虫――正確を期すなら甲虫――に似た外見に、生理的な嫌悪感を抱いてしまうが、単体での戦闘力で言うなら〈カタストロ〉と大差ないのだ。

経験値の多い〈機獣少女〉はそれにいち早く気付き、単独ではなく、チームでの戦闘を徹底させた。〈プレケース〉と〈カタストロ〉の決定的な違いは数であり、同等の数をもって当たれば、互角に戦える。

それでも、序盤の混乱はひどく、その傷跡は深いものとなった。

防衛に失敗した〈ジェネレーター〉は四基。

重傷の〈機獣少女〉は、報告されているだけで五十名を超えていた。

〈機獣少女システム〉が完成して以来、このような被害が出たのは前代未聞だ。

惑星ゼヘナの守護者（ガーディアン）にして、人々の心の拠り所（アイドル）。

現代の戦乙女（バルキリー）。

そういった〈機獣少女〉に対する認識が失われつつあった。

●　●　●

カタナによる剣術の極意は速さにあるという。

最適な位置と角度を見極め、カタナを振るう――それを如何（いか）に一瞬で出来るかで、剣術の腕は決まる。

一般的な剣も、『斬る』という表現を使われるが、実際には対象の結合部分を『壊している』に過ぎない。だが、カタナは結合部分を『切断』する事に長けている。

故（ゆえ）に、カタナを振るうのに必要なのは筋力ではなく、速さになる。一流の使い手になると、カタナを鞘（さや）から抜く瞬間すら相手に見せないという。

そう、彼女のように――

「――ふッ！」

短く息を吐き、右手に持ったカタナが〈プレケース〉の触手を斬り飛ばす。文字通りの返す刀で両足――すべて『足』なのだろうが、ここでは地面に着いているものを指す――を切断し、更にカタナの柄の部分で顎を打ち上げる。多くの生物は顎に衝撃を受けると脳が揺れ、平衡感覚を失い、立っていられなくなる。〈プレケース〉も例外ではないらしく、残った足で踏ん張ろうとはしているが、明らかに動きが緩慢になっている。そうして出来た隙を逃さず、少女は得物の先端を、外殻に覆われていない、首に相当する関節部に突き立てる。

これだけの行為を一瞬、本当に瞬く間にやってのけていた。恐らく、撮影した映像を見せても、何をしたか判らない者も多いだろう。

とにかく――速い。

動作の度に白い振袖がなびき、黒い袴が風をはらむ光景は、戦闘というより円舞を思わせる。

「――滅せよ」

少女が呟く。それに応えるように、〈プレケース〉の関節に突き立てられたカタナから青い閃光が生まれ、流し込まれた機力が威力に転化する。

すなわち、相手を殺す。

昆虫ならではの瞳のない目から光が消え、〈プレケース〉が頽れる。全高こそ成人男性と同程度だが、奥行きがあり、体重に関して言えば三倍はあるだろう図体が倒れる光景は、なかなかに壮絶だ。〈カタストロ〉のように跡形も残さず塵となって消えたりはせず、体液や肉片を撒き散らす場合もあるため、より『命を奪う』という行為を生々しく感じさせる。

「……」

しかし、少女は物言わぬ骸となった敵を無表情に一瞥すると、手にしたカタナを振り、次の標的に意識を向ける。

少女の使っているカタナ――MBデバイス〈スサノオ〉には自浄機能があり、常に刀身を最高の状態に維持するため、斬った対象の体液などを払い飛ばす必要はないのだが、これは癖のようなものだ。自然に綺麗になると判っていても、汚物は払いたくなる。

カナコ・T・シングウジ。

長く艶やかな黒髪。静謐で、しかし強い意志を感じさせる、縞瑪瑙のような黒い瞳。派手ではないが、隙なく整った容貌は、東方大陸美人を体現している。すらりと伸びた手足は華奢でありながら、出るべき所は出ており、十七歳という少女の理想形を思わせるスタイルである。

〈戦姫〉の二つ名に恥じぬ、強さと美しさを兼ね備えた少女だ。

そして、此処にはもう一人、〈機獣少女〉がいた。

カナコより若い――いや、幼いと言うべきだろう。なにせ、まだ小学五年生だ。小柄な体躯に、まだ伸びきらぬ手足。それでも戦装束に身を包み、敵と戦う姿は危なげがなく、むしろ堂に入っている。ミニスカートと和服を組み合わせたような、赤いMBジャケットを纏い、手にした薙刀で敵を薙ぎ、時に突き立てる動きは、実に流麗だ。

ツバキ・タカチホ。

左側頭部でサイドテールにした、セミロングの黒い髪。穏やかな色を湛えた、蒼玉のような青い瞳。年齢相応の可愛らしい顔立ちに浮かぶ、どこか大人びた表情がアンバランスでありながら、不思議と彼女には似合っていると思わせる。

年端もいかぬ少女でありながら、その表情は紛れもない戦士のもの。

〈難攻不落〉の二つ名は伊達ではない。

「――――」

ツバキもまた、目の前の敵を見据え、その攻撃を躱し、時に流し、捌いていく。カナコのような速さはないが、ひたすら正確で確実なのだ。けして焦らず、しかし隙は逃さず、カウンターの要領で相手を追い詰めていく。

速攻型のカナコと、堅実型のツバキ。

〈戦姫〉と〈難攻不落〉。

戦い方の違いはあれど、どちらも東方大陸のトップエースである。

「――滅せよ！」

一体目の〈プレケース〉を仕留め、その骸を踏み台に二体目の背後に着地すると、振り返る事なく、ツバキは得物の穂先を敵の外殻の隙間に突き立てた。

青い閃光。地に伏す音。それだけで結果は見るまでもない。

「さすがね、ツバキ。今ので何体目？」

周囲の〈プレケース〉はすべて殲滅したのだろう。戦闘終了直後とは思えない気軽さで、ツバキに声をかけてきたのはカナコだ。その表情に疲労の色はなく、白い振袖にも関わらず、目立った汚れは見当たらない。

「〈カグツチ〉、数えていますか？」

『今日だけで十二体目、総数なら三十三体目だな』

ツバキの問いに答えたのは、時代がかった女声を思わせる口調の機械音声。それは彼女の手にしている薙刀――MBデバイス〈カグツチ〉のものだ。

『カナコはどうなのだ？』

「私？　〈スサノオ〉、スコア報告。今日までの〈プレケース〉だけで」

『――四十五体目です』

カナコの問いに、彼女のＭＢデバイスである〈スサノオ〉が事務的に答える。

〈カグツチ〉は特殊なＭＢデバイスだ。普通は先ほどのような曖昧な質問では、何を問われているか判断が出来ない。カナコのように、質問内容を明確にし、その対象まで絞る必要がある。会話の文脈から質問の意図を読み取り、正確に求められている回答を提示するには、高度な人工知能が必要となる。そして、ＭＢデバイスにそのような物は実装されていない。

『ぬぅ……』

「仕方がありませんよ、〈カグツチ〉。カナコさんの方が倒す時間も短いですから」

悔しがる〈カグツチ〉を、ツバキは苦笑を浮かべて宥（なだ）める。本来のＭＢデバイスに、このような感情の発露はない。そもそも、使用者とコミュニケーションを取る機能がないのだ。〈スサノオ〉がカナコの問いに答えたのは、時報を伝える音声ガイドのようなもので、ＭＢデバイス自身が思考し、言語化している訳ではない。

「そうそう。勝負している訳でもないしね」

と、カナコはツバキの頭を撫（な）でつつ、〈カグツチ〉にだけ見えるように、挑発的な笑みを浮かべて見せた。ＭＢデバイスには記録用のカメラとマイクがあり、それが目と耳の役割を果たす。

『ツバキ！　やはり、この女は性格が悪いぞ！』

「急にどうしたんですか、〈カグツチ〉？　カナコさんは優しい人ですよ」

「ひどいわ。私、そんな風に思われていたなんて……」

怒鳴る〈カグツチ〉。宥めるツバキ。そして、やはり〈カグツチ〉にだけ見えるように舌を出して見せるカナコ。

『騙されるな、ツバキよ！　ええい、腹立たしい奴め！』

「おお、怖い怖い」

「もう、二人ともそれくらいに――あら？」

〈カグツチ〉に通信を知らせる電子音が鳴り、ツバキは続く言葉を中断した。どうせ、休憩がてらの雑談だ。むしろ、カナコと〈カグツチ〉の口論――とも呼べないレベルだが――を終わらせるのにちょうどいいと判断し、ツバキは通信に応じた。

『――ツバキちゃん、ベアトリーチェだよ。声、届いてる？』

「はい、よく聞こえています。タオエンさんも一緒ですか？」

『うん、合流したところ。タオ姉（ねえ）に代わるね』

わずかな無音を挟み、再び〈カグツチ〉のスピーカーから聞こえてきた声は、ベアトリーチェよりも落ち着いた調子だった。姉のタオエンだ。
『タオエンです。気になる反応を感じたので、連絡しました』
「どういう事？」
『カナコさんですね。お二人とも壮健のようで、安心しました』
通信を介してだと、あまり安心しているようには聞こえないが、タオエンは普段から感情を表に出さないので、余計に本心が伝わりにくい。
『話を戻します。私が感じたのは、空間転移のための『門』が開く際の反応です』
「それは、私がゼヘナに帰還する際に、タオエンさんが開いたあれですか？」
ツバキが、諦めていた地球からの帰還を果たせたのは、タオエンの能力のおかげだ。ゼヘナと繋がりやすくなっていたらしいが、運が良かったと思うだけで、ツバキはそれ以上の事は気にしていなかった。
『はい。限りなく同質のものと思われます。それが二ヶ所で同時に開きました』
『一つはわたし達が向かうから、もう一つはツバキちゃん達に行って、様子を見てきてほしいの』
こちらはベアトリーチェだろう。姉妹でありながら、テンションや雰囲気に随分と差があるのが、通信越しでも伝わってくる。
「カナコさん、構いませんか？」
「いいわ。私達の任務は哨戒を兼ねた遊撃だから、気になる事は調べましょう。何かが来たのなら、敵の新手かもしれないしね」
戦線の縮小により、戦況は事実上の膠着状態となっている。現在は、稼働状態の〈ジェネレーター〉に防衛戦力を集中し、情報収集のために、一部の〈機獣少女〉が特別な任務を帯びて行動している。カナコとツバキのように。
「だそうです。場所のデータを送ってください」
『助かります』
ツバキが承諾した旨を伝えると、タオエンから送られたデータを〈カグツチ〉が受信し、更にいくつかのやり取りが行われると、通信は終了した。
「行きましょう。此方に来た『なにか』が、移動してしまわないうちに」
「そうね。どうせ来るなら、もっと可愛くて、仲良くなれる生き物を希望するわ」
「カナコさん、可愛いものが好きですよね」
「ええ。だから、ツバキも大好きよ」
『ふん。節操なしめ』

「うるさいわよ、負け犬」

移動を開始しながらも、じゃれ合うカナコと〈カグツチ〉を宥(なだ)める事はせず、ツバキはただ苦笑を浮かべながら見守った。

第十九話

『カイヘンサレタセカイ』

「連絡事項は以上だ。じゃあ委員長、号令を」

「はい。起立、礼――」

クラス担任の神譲（かみじょう）教諭の言葉に従い、委員長の少女が号令をかける。クラスメイト全員の『さようなら』という挨拶（あいさつ）に、「おう、気をつけて帰れよ」と担任が返し、週初めの学校生活は終了した。

ほとんどの生徒が、そのままランドセルを背負って教室を出るなり、残っておしゃべりに興じる中、一人、静かに席に座り直す少女がいた。

ポニーテールにした長い黒髪。ツリ目だが攻撃的な印象はない、琥珀（アンバー）のような橙色（だいだいいろ）の瞳。体格は平均的な小学六年生のそれで、幼さを多分に残した可愛らしい容貌（ようぼう）なのだが、その表情はほんの少しだけ、周囲の同級生より大人びて見える。普段は年齢相応の朗（ほが）らかな表情が多い少女なのだが、今日の彼女は、どこかぼんやりとしており、物憂（ものう）げな雰囲気だった。

流遠（るとお）やみひめ。

彼女はとある少女との出会いから、様々な経験をし、様々な事を知った。

他人の事。

自分の事。

そして、自分の知らない『別の自分』の事。

迷い、悩み、苦しみ、決断し、戦い抜いた。

それは普通の小学生にはありえない出来事ばかりだった。

だからこそ、すべてが終わり、本来の日常に戻った今という瞬間が、やみひめにとっては非現実的に思えてしまっていた。

「……」

何の用事もないなら、ホームルームが終われば帰らなければならない。何をするでもなく、放課後の教室にぽつんと残っていても仕方がない。

ふと、教室を見回す。まだ半数ほどのクラスメイトが残って、友達同士でおしゃべりに花を咲かせている。平凡な、何処（どこ）の学校でも見られる、普通の光景。

そのはずなのに――

「やみひめ？　帰らないの？」

と、やみひめに声をかける少女がいた。前髪の一部に白いメッシュが入った、それ以外は黒いロングヘア。静謐（せいひつ）な色を湛（たた）えた真紅の瞳。

とても綺麗な少女だ。

問題なのは、彼女がなぜ、小学生の教室にいるのかだろう。どう見ても高校生くらいの

容姿で、若い新任教師だと言われても信じられる。

明らかに小学生には見えない――が、彼女も歴(れっき)とした小学六年生だ。

クラウ・P・ブラン。

フランス人の祖母を持つクォーターで、そのためなのかは判らないが、同年代に比べ異常に発育が良い。そのスタイルの良さは周囲から憧れの的だが、本人はコンプレックスに感じているというのが皮肉な話だ。

「クラウ……」

「大丈夫？　今日、なんだか元気ないよ……？」

親友の様子を心配してか、長身を屈(かが)め、不安げな表情を浮かべるクラウ。そのビジュアルと大人びた雰囲気から、彼女に対して気後(きおく)れする者は多いが、実際にはとても優しい少女なのだ。むしろ、控えめで大人しい。

「ううん、大丈夫だよ。先週は色々あったから、気が抜けちゃったのかも」

「そう？　なら、いいけど……」

「そう！　ごめんね、心配かけて」

やみひめの元気が空(から)元気に見えたのか、クラウは納得はしていないようだが、それでも追及する事はしないでくれた。この年齢で、こういう気遣いが出来るのが、クラウという少女だ。それが良い事かは判断が難しいが、やみひめは親友の気遣いに素直に感謝した。

そして、先週の出来事について話せない事に、罪悪感も覚えていた。

一連の事件の終息と、別の星から来た友人との別れ。

それは本当に急な事で、やみひめはまだ、心の整理が出来ていなかった。

●　●　●

爆発事故でもあったような、凄惨(せいさん)な様相を呈した夜の駐車場。

まるで、そういうフィルターがかかっているか、色付きの眼鏡(めがね)をかけているかのように、世界が紅(あか)く染まっていた。

〈カタストロ〉を殲滅(せんめつ)した直後、タオエンと名乗った少女が現れ、『門(ゲート)』を開いた。その先にはツバキの故郷の星、ゼヘナの風景が広がっていた。どういう理屈かは知らないが、紅い世界の影響で、ゼヘナと繋がりやすくなっているらしい。

やみひめの目の前にはツバキがいて、その表情には、感慨のようなものが浮かんでいる。

当然だろう、帰る手段が提示されているのだから。

「ツバキ……」

彼女の名前を呼ぶ、やみひめの表情は複雑だった。ツバキの幸運を喜びたい。だが、それは彼女との別れを意味する。

それも――今生（こんじょう）の別れだ。

「……私、ゼヘナに帰るのは諦（あきら）めていました」

ぽつりと、『門（ゲート）』――いや、その先の風景を見つめたまま、ツバキが呟いた。

「やみひめさんのお家でお世話になって、このまま地球で暮らすのもいいかなと思っていました」

ツバキの言葉を聞きながら、やみひめは彼女と過ごした時間を思い返していた。同じベッドで眠り、食事を共にし、一緒に風呂にも入った。

「楽しい経験も、たくさんさせてもらいました」

アサトも誘って、日用品を買いに街に行った。夜の公園で戦闘訓練もした。ツバキ一人で図書館にも行ったし、アサトとクレープを食べた話も聞いた。

「だけど、いざこうして帰れるとなったら、帰りたいと思っている自分がいるんです」

やみひめ達に話しているようで、独り言にも聞こえるツバキの言葉。それを、やみひめも、その隣にいるアサトとベアトリーチェも、静かに聞いていた。口を挟める雰囲気ではなかったし、挟むべき言葉も浮かばなかった。

「私、ゼヘナに帰ります」

ツバキは、ようやくやみひめ達の方を向くと、はっきりと、穏やかな表情を浮かべて言った。

「……そっか」

ツバキの決意は固まっている。それは彼女の表情を見れば明らかだ。先の言葉に嘘はないのだろう。だが、それでも故郷に帰ると本人が決めたのなら、引き留める事など出来ない。

「そうだよね。帰れるなら、帰りたいよね。だって、自分の、故郷、だもんね――」

自分を納得させるように、やみひめは言葉を重ねる。笑顔で送り出そうとする。なのに、やろうとすればするほど、言葉はつまり、嗚咽（おえつ）が混じってしまう。

（私、こんなにツバキの事、好きだったんだ……）

共に過ごしたのは一週間にも満たない時間。

危険な目に遭（あ）うどころか、やみひめは一度死んですらいる。

それでも、楽しい事も、嬉しい事も、たくさんあった。

ツバキと出会った事が、良かったか悪かったかで答えるなら、間違いなく良かった。

だからこそ、別れがつらい。

きっと、もう二度と会えないから。

「う、うぅ……」

泣きたくない。ツバキを困らせてしまうから。

でも、そう思うほど、涙が止まらなくなってしまう。

「……？」

ふと、頭に何か載せられた感触を覚え、顔を上げる。其処には見知った少年が立っていて、やみひめは、彼が頭を撫でてくれているのだと気付いた。

アサトだ。

いつも気怠そうな表情をした、高校三年生。〈カタストロ〉の事とは無関係なのに、此処までついてきてくれた。やみひめにとって特別な存在。

彼は何も言わない。『泣くな』とも『ツバキが困るだろ？』とも。ひょっとしたら、彼自身、やみひめに何を言っていいか判らないのかもしれない。だからせめてもと、態度で励ましてくれているのかもしれない。

その様子を見て、ツバキがくすりと笑った。

「お二人とも、本当にお世話になりました。感謝してもしきれません」

「気にしないでいい。恩着せがましい事を言うつもりはないし、実際、俺は大した事はしてない」

ツバキの小学五年生とは思えない律儀な態度に、アサトは苦笑混じりに返した。

「そんな事ありません。ごちそうしていただいたクレープ、美味しかったです。私、一生忘れないと思います」

「……そうだな。あのクレープは美味かった」

アサトが、やみひめの頭に置いていた手を、ツバキの頭上に移動させた。一瞬、躊躇したが、ツバキが微笑を浮かべて『どうぞ？』という表情を浮かべたので、アサトはツバキの頭を撫でた。角度の問題でアサトからは見えなかっただろうが、ほぼ目線が同じ高さのやみひめからは、ツバキの満ち足りた表情がはっきりと見えた。

「やみひめさん、今日までありがとうございました」

アサトとの別れを済ませ、改めてやみひめに感謝の言葉を告げるツバキ。

しかし――

「本当に、本当に……ありがとう、ございました……っ」

「！」

ツバキの澄まし顔が決壊した。彼女の泣き顔を見るのは初めてではない。それでも、この局面で涙を見せられると、また泣いてしまう。ようやく止まっていた涙が、また溢れて

しまう。

ツバキが泣いてくれている。自分との別れを悲しんでくれている。

それが何より、やみひめは嬉しかった。

●●●

こうして、別の星から来た友人は帰っていった。あの後も、なんだかんだで別れられず、ツバキを『門（ゲート）』の先へ送り出すまでかなりの時間を必要としたのだが、すべてを思い返すと泣いてしまいそうなのでやめておく。

あれから、やみひめの体感時間では、四日が経過していた。〈カタストロ〉を殲滅（せんめつ）し、ツバキがゼヘナに帰還したのが、先週の木曜日の夜。今日は週明けの月曜日。間違いなく四日が経過している。

しかしそれは、あくまでやみひめにとってはだ。

やみひめが〈カタストロ〉に対して〈分断するもの（ディバイダー）〉を使用した際に起きた、世界が紅（あか）く染まった現象。タオエンが言った通り、ツバキ達が通って『門（ゲート）』が消えて間もなく、その現象は元に戻った。すなわち、世界が本来の色彩を取り戻した。

しかし、それはただ元に戻った訳ではなかったのだ。

駐車場だけでなく、その周囲に及んだ破壊の痕跡が、何事もなかったように元の状態に戻っていた。修復された訳ではなく、破壊などされていなかったように。

更に、アサトが背負っていたクラウは消え、彼女の自宅に連絡してみると、普通に家で就寝していた。その前日にクラウとの戦いの場となった公園の被害も、クラウに襲われて入院した大学生の事件も、ツバキがやみひめの家に親戚として泊まっていた事も、誰も覚えていなかった。

そんな事実は存在しなかった事になっていた。

隠蔽（いんぺい）工作や記憶改竄（かいざん）などではない。小さな範囲での事とはいえ、この数日間の出来事が変化した事を、誰も認識していないのであれば、これは世界改変だ。

つまり、この世界には〈カタストロ〉も〈機獣少女〉も、最初から来ていない事になる。救いだったのは、改変前の記憶を持っているのが、やみひめだけではなかった事だろう。理由は判らないが、アサトも覚えていたのだ。

もし、そうでなかったら、やみひめは正気を保てなかっただろう。ツバキとの思い出が、すべてなかった事になるのだから。

世界改変の事実に気付き、恐慌状態となったやみひめは、アサトから離れられず、今日

も彼の家から登校していた。世界の辻褄合わせの結果か、やみひめが水曜日にアサトの家に泊まっていたのは、彼女の両親がそれぞれの実家に戻らなければならず、しかし学校を休ませる訳にもいかないため、アサトの家に預けた――という事になっていた。アサトは休んでいいと言っていたが、改変の影響がどういう形で出ているか確認するため、やみひめは登校する事にしたのだ。

結果は、普段通りの完璧な日常だった。完璧すぎて気分が悪くなるほどに。

当然だ。この世界には、日常が一変するような要因は訪れていないのだから。

（全部、元通り――ううん、これが本来の世界……なんだよね）

違和感が存在しない違和感。

異常が正常になっている異常。

（なんだか、気持ち悪いよ……）

誰も違和感を覚えない。

誰も異常に気付いていない。

それは、ひどく孤独だ。

「あ……」

やみひめと目が合ったクラウが、何か言おうとして、気まずそうに目を逸らした。下校中、ずっと彼女はこの調子だ。やみひめを気遣って、しかし、何と声をかけていいか判らないのだろう。

クラウもまた、一連の事件を覚えていなかった。確認した訳ではない。だが、覚えていれば何も言わないはずがない。世界改変とは関係なく、〈カタストロ〉に取り付かれていた間の事は、記憶にないのかもしれないが。

「大丈夫だって。心配しないで」

「ち、違うの！　ううん、違わないけど……だって、『大丈夫？』って訊かれたら、『大丈夫』って言っちゃうでしょ？　だったら、他に訊き方があるはずなのに、私、何も思いつかなくて……。やみひめ、つらそうなのに……私、何も出来ない……！」

クラウは普段から物静かで、声を荒げたりしない。だからといって、けして大人な訳でも、達観している訳でもない。いくら早熟でも、彼女も小学六年生の少女なのだ。人一倍優しいクラウが、親友の苦悩に気付いて、平気でいられるはずがない。

それは、やみひめも知っていたはずだ。それなのに、自分の事でいっぱいいっぱいになって、クラウの事まで気が回らなかった。

「ありがとう、クラウ。私、自分の事ばかりで……ごめんね」

すぐ近くにいる親友の事を蔑ろにしてしまっていた。クラウの優しさに甘えていた。

「私ね、久しぶりにクラウと会えて、すごく嬉しい！」

「……そうだね。私、風邪で火曜と水曜は休んでたし。木曜と金曜は、やみひめが風邪で休んでたから、ちょうど一週間ぶり。私もね、その……すごく嬉しい、よ？」

無邪気に言うやみひめと、照れくさそうに返すクラウ。ようやく二人の表情に笑みが浮かび、いつもの雰囲気が戻りつつあった。

すると――

「――ねえ。あれ、橘さんじゃない？」

此方に向かって歩いてくる男性の姿を認め、クラウが言った。やみひめが振り向くと、確かに、アサトだった。そういえば、学校が早く終われば迎えに行くと言っていたのを、やみひめは思い出す。

自分を心配して迎えに来てくれた――その事実に、やみひめは顔がにやけるのを止められない。

「……ちょっと、悔しい」

その様子を見たクラウが、彼女にしては珍しく不貞腐れたような口調で言った。

「え？」

「橘さんが来たら、簡単に機嫌が良くなった」

「クラウ……もしかして、やきもち？」

やみひめの半信半疑といった疑問に、クラウは少しだけ逡巡を見せたが、すぐに黙って頷いた。頬が若干だが紅潮している。

「私――やっぱり、クラウの事、大好きだよ！」

「うん。私も……」

嬉しそうに抱きつくやみひめと、控えめに抱き返すクラウ。テンションはやはり対照的だが、不思議と温度差は感じない。気持ちが一方通行ではないからかもしれない。

「あー……キマシタワー、建てるか？」

「！？　け、結構です……」

すぐ目の前まで来ていたアサトが、特に表情を変える事なく言った。やみひめは？顔だが、クラウは意味が判っているらしく、更に顔を紅潮させていた。ちなみに、『キマシタワー』というのは、一種のスラングだ。

特に親しい訳ではないが、クラウとアサトは面識があり、やみひめは共通の知人に当たる。

「アサト、迎えに来てくれたんだね」

「間に合えば行くって言ったろ」

嬉しそうに笑みを浮かべるやみひめに、アサトはほんの少しだけ苦笑を浮かべる。

彼は、世界改変前の記憶を唯一、やみひめと共有している。まだ十八歳の少年といえど、十二歳の少女と比べれば大人だ。現実を受け止める事は出来る。しかし、やみひめはそうではない。だから、彼女が笑顔を浮かべている事に対する安堵や、彼女に何もしてやれない自分に対する忸怩(じくじ)たる思いがあるのだろう。

「あ！　アサト、私、クレープ食べたい！」

「お前、俺を財布だと思ってないか？」

「思ってないよ！　自分の分は自分で出すもん！　ね、クラウも一緒に行こうよ！」

「え？　でも、お邪魔に……」

やみひめの誘いに、クラウはちらりと、アサトの表情を窺(うかが)うような素振(そぶ)りを見せた。

「いいよ。今日もアサトの家に泊まるんだし」

「……え？　今日も？」

やみひめは『だから気を遣わなくてもいい』というつもりで言ったのだろうが、クラウはその言葉に含まれる意味を深読みしてしまったらしい。驚愕と同時に、恥じらいの表情を浮かべている。

彼女は世界改変の事を知らない。やみひめがアサトの家に泊まっている理由どころか、その事実も同様だ。故に、『一人暮らしの男性の家に女の子が泊まる』という事が、一般的にどういう意味を持つかを考えれば、クラウの想像は推して知るべしだろう。

「……やみ子、誤解を招く言い方するな」

「ほえ？」

ただでさえ気怠(けだる)い表情に、更に疲労の色を上乗せしたような顔をするアサト。だが、やみひめだけが自分の発言の意味に気付いていない。仕方がないと言えば仕方がないのかもしれない。むしろ、小学六年生でそういう発想が出来るクラウの方が早熟なのだ。

結局、アサトが事情を話してクラウの誤解は解けたが、やみひめは最後まで状況を理解していなかった。

●
●
●

クレープの誘いは断わり、クラウは一人で帰路に就(つ)いていた。遠慮した訳ではなく、今日のやみひめの様子から、自分がいると気を遣わせてしまうと思ったのだ。親友でも話せない事はあるだろうし、親友だからこそ話しにくい事もある。それなら、別の信頼している相手といた方がいい。

「クレープ、一緒に食べたかったなぁ……」

ぽつりと呟くクラウ。

校則で禁止されている訳ではないが、やはり小学生が学校帰りに買い食いというのは、色々な面で敷居が高い。だが、高校生のアサトが一緒にいれば、その辺りもクリア出来る。千載一遇は言い過ぎかもしれないが、せっかくのチャンスをふいにしたのは悔やまれる。

だが、それでやみひめが元気になれるなら構わない。

（明日は学校で、クレープは美味しかったか訊こう。その時には、元気になってるといいな……）

そんな事を思っていると――

「――君、高校生？　美人さんだね」

不意に男性に声をかけられた。声をかけてきたのは三人組の一人で、全員、二十代前半から半ばくらいに見える。

「え……？」

「ひょっとして大学生かな？」

戸惑うクラウに対し、青年はにこやかに距離を詰めてくる。あとの二人も同様だ。ナンパだろう――と、経験から理解する。この時間に私服でいる事から考え、明らかに暇な若者といったところだろう。

「すみません。もう帰るところなので」

そう言って、クラウは愛想笑いを浮かべた。煮え切らない返事をすると、押せば何とかなると思われる。あまり邪険にすると逆上される。やんわりと、しかし明確に拒絶の意思を示すのが、穏便に済ませるコツだ。『こいつは靡かない』と判れば、すぐに『次』にいくのが利口なナンパのやり方だから。

しかし、彼等は利口ではないらしい。口調こそチャラいままだが、しつこくクラウを遊びに誘おうと言葉を重ねてくる。

「……」

ふと、クラウは違和感を覚えた。この光景――いや、彼等に見覚えがある気がする。以前にも、彼等に声をかけられた。そして……どうした？

見れば、最初に声をかけてきた青年は、腕に包帯を巻いていた。まるで、大怪我をして、それを隠しているような……。

「な、なあ……」

「あん？」

三人組の一人が、何かに気付いたように戸惑い気味の声を上げた。

「その子が背負ってるの、ランドセルじゃね？」
「え……」
「マジかよ。じゃあ、小学生……？」
半信半疑の三人組の視線が、改めてクラウに集中した。それに、こくりと頷くと、彼等は乾いた笑いを浮かべながら、クラウに背を向けた。さすがに小学生を相手にする気はないのだろう。いくら見た目は問題なくとも、法的にアウトだ。そのくらいの判断は出来るらしい。
「あ、あの！」
去りゆく三人組に、今度はクラウが声をかけた。
「あ、ごめんねー。知らなかったからさ。通報とかはちょっと……」
びくりと振り返り、最初の態度が嘘のように、腕に包帯を巻いた青年は弁解した。
「そうじゃなくて……その包帯、どうしたんですか？」
どうしても気になった。なぜ、包帯を巻いているのか。その包帯の下が、どうなっているのか……。
「え？　ああ、これね……」
「こないだナンパした女にやられたんだよな！」
「腰に手を回そうとしたら、逆に関節極められてな！」
「うるせーよ！　お前等、俺を置いて逃げやがって……」
ゲラゲラ笑う二人に、包帯の彼が恨みがましい視線を向ける。どうやらナンパは常習で、それによって、文字通り手痛い目に遭ったらしい。
「関節を……。じゃあ、大怪我ではないんですね？」
「捻られただけだから、湿布貼ってるだけだよ」
「そうなんですね。よかった……」
心底、ほっとした様子のクラウに毒気が抜かれたのか、三人組はやけに丁寧に謝罪の言葉を告げて、今度こそ去っていった。彼等にしてみれば、自分をナンパした見ず知らずの男を心配する、心優しい少女に思えたのだろう。
（なんで、あんなに気になったんだろう……）
彼等に会うのは初めてのはずだ。なのに、あの包帯が自分のせいに思えた。
（なんで、あの包帯の下に、手首から先がないと思ったんだろう……）
大怪我を負っていて、手首は斬り落とされたんじゃないかと思った。
（なんで……私が斬り落としたなんて思ったんだろう――）
そんなはずがない。生きた人間の手首を斬り落とすなど、小学生でなくても無理だ。そ

れこそ、大きな刃物と、尋常でない膂力でもない限り――

「――っ!?」

一瞬、よく判らない映像が脳裏に浮かんだ。市街地に佇む、黒いドレスのような衣装を着て、両手に巨大な爪を思わせる何かを持った自分の姿。

立っていられなくなり、その場に蹲る。自分の知らない自分の姿。記憶にない記憶。怖い。気持ち悪い……。

「たす……けて……っ!」

「――クラウ!」

混濁する意識の中でも、その声ははっきりと聞こえた。自分を呼ぶ、大事な親友の声だ。

ついさっき別れて、今頃は大好きな人とクレープを食べているはずなのに。

「〈分断するもの〉――その威を示せ!」

何事か叫び、こちらに駆けてくる。黒い和服を着て、右手に紅い輝きを宿している、見知った親友の姿。その背後には、彼女の想い人も見えた。

「やみひめ……!」

「クラウ!」

手を伸ばす。相手も、鏡写しのように、手を伸ばしてくる。

手と手が触れ合う、その瞬間。

視界が眩い光で塗り潰された。

●
●
●

「街からだいぶ離れちゃったね」

「敵性体であるなら、その方が被害が出ず、好都合です」

魔女のような風体の二人の少女が、滞在しているオオミヤ・シティからやや離れた荒野を、滑るように移動していた。スケートのようだが、両足はわずかに宙に浮いており、地面を蹴るような動きもない。例えるならホバー走行に近いだろう。

ファフロウ姉妹だ。

姉のタオエンが、空間転移のための『門』が開いたと感じ、その確認をするために彼女等は移動していた。

「！　タオ姉、あれじゃない?」

茶色いショートヘアの少女――妹のベアトリーチェが示す先には、二つの人影が確認出来(でき)る。距離があるため詳細は判らないが、そのシルエットは〈プレケース〉のものではない。

移動速度を落とし、警戒しつつ、ゆっくりと人影に近づいていく。

「あれは……」

銀色のセミロングの少女――タオエンの無表情に、わずかに驚愕の色が浮かぶ。すぐ隣のベアトリーチェも同様だ。当然だろう。其処(そこ)にいたのは、彼女等の知る、其処にいるはずのない人間だったのだから。

「なんで、あの二人が……?」

「状況から見て、転移して来たと言うしかありません」

地球から遠く離れた別の星、ゼヘナに現れた来訪者。

それは流遠(るとお)やみひめと、その友人だった。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第十九話をお届け致します。

まず先に謝ります――もうちょっとで終わりません。

やみ子が『狂襲姫』シリーズの〈ヤミヒメ〉の平行世界の姿であるという、書くべきシーンを書いたので、余計な事は考えず終わらせようとしたツケが回ってきた結果です。直前のサイドストーリーで、ゼヘナに帰ったツバキのその後を書いているうちに、もっとちゃんと書きたくなってしまいました。

〈カタストロ〉との決戦も、ドラマ優先でバトルとしては地味になったので、そのリベンジもしたい。クラウにも花を持たせたい。カナコとファフロウ姉妹も書きたい。

そういった欲求から、第二部的に続ける事にしました。

願わくば、これが作者の単なる自己満足でない事を……。

それでは謝辞を。

今回は久々にちゃんとクラウが出るので、紙白さんにチェックをお願いしております。娘さんの今後を、引き続き見守ってあげてください。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

次回より舞台は惑星ゼヘナに移ります。

年内に終わるかなぁ……終わらないんじゃないかなぁ……ま、ちょっと覚悟はしておいてください（好きだな、このネタ）。

２０１６／９／９　流遠亜沙

※２０１６／10／15追記

第十八話から『第二部』扱いという事で、この第十九話にも若干の変更が加えられています。と言っても、やみひめの台詞内での『クラウ』の表記が、ひらがなからカタカナに変わったのみです。理由は単純に、『読みにくいから』です。

第十八話共々（ともども）、内容自体の変更はありません。引き続き、『ゾイやみ』をよろしくお願い致します。

アンケートに答える
『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX 第2部』小説ページに戻る